

# 地理的分野だけで完結させない 「見方・考え方」を働かせる授業の在り方

## — 小中高を通した展開と発展性 —

広島大学大学院教育学研究科 准教授 永田忠道

### 1 小中高の一貫性を見据えた見方・考え方

このたびの「社会的な見方・考え方」の公式見解は、新たな学習指導要領と解説において明快に示されている。とくに、小・中・高等学校の学校種をこえて社会科、地理歴史科、公民科を貫く「社会的な見方・考え方」の構成要素として整理したとされているように、公式見解としての「社会的な見方・考え方」は、小学校から高等学校までを通して、それを働かせ、きたえていくことが期待されている。

小・中・高等学校の学校種をこえて社会科、地理歴史科、公民科を貫く「社会的な見方・考え方」には、我が国の初等・中等教育における社会認識教育の在り方に対する原点回帰の発想を見いだすこともできる。例えば、高等学校の地理歴史科と公民科の科目構成の転換、とくに新設される「地理総合」と「歴史総合」、「公共」の三科目の在り方は、分断されてきた社会認識教育を今一度、包摂的にとらえ直そうとする契機となる動向でもある。その際の大きな鍵になるものが、このたびの学校種をこえて社会科、地理歴史科、公民科を貫く「社会的な見方・考え方」の構成要素である。

ここでは、小学校から高等学校までの各学校段階における身近な地域を対象とする学習を事例として、このたびの「社会的な見方・考え方」の構造についての検討を行い、その中でもとくに中学校社会科地理的分野の授業において、今

後にむけて大事にすべき観点や考え方、その在り方について考えてみる。

### 2 小学校第3学年での見方・考え方

社会科学習の起点となる小学校第3学年の最初の内容は「身近な地域や自分たちの市区町村のようす」である。子どもたちにとっての最初の社会科学習で働かせることが期待されている「社会的な見方・考え方」の視点と方法は、以下のように例示されている。

**視点** 都道府県内における市の位置、市の地形や土地利用、交通の広がり、市役所など主な公共施設の場所と働き、古くから残る建造物の分布など。

**方法** 身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現する。

ここでは、子どもたちの身近な市区町村が対象となることから、子どもたちの生活の場である身近な地域を、位置・地形・土地利用・広がり・場所と働き・分布といった視点で見つめ直したり、とらえ直したりすることで、自分たちの生活空間は自分や自分たちの固有空間だけではなく、多くの他者との共有空間でもあることの認識を促す例示となっている。加えて、場所による違いを強調することで、改めて自分たちの地域は必ずしもどこにでも同じようにある存在ではないことについてもつかませようという意図が、ここでの視点と方法には包含されている。

そして、地域の生産や販売の仕事、安全を守る働き、市区町村のようすの移り変わりの学習

を経て、第4学年以降は都道府県から日本、世界へと、中学校社会科への学習内容との接続が図られていく。

### 3 中学校地理的分野での見方・考え方

中学校社会科地理的分野での学習は、世界と日本の様々な地域の学習が中心となるが、この段階でも再び生徒の身近な地域を対象とした学習の機会が引き続き確保されている。このたびの学習指導要領の改訂では、内容C「日本の様々な地域」に、「(1)地域調査の手法」、「(4)地域の在り方」が設定された。この地理的分野における地域学習の「社会的な見方・考え方」の視点<sup>\*1</sup>と方法の例示は、以下のようなものである。

#### 〔1〕地域調査の手法

**視点** 場所など、対象となる場所の特徴など。

**方法** 適切な主題や調査、まとめとなるように、調査の手法やその結果を多面的・多角的に考察し、表現する。

#### 〔4〕地域の在り方

**視点** 空間的相互依存作用<sup>\*2</sup>や地域など、地域の結び付きや地域の変容、持続可能性など。

**方法** 地理的な課題について多面的・多角的に考察、構想し、表現する。

地理的分野での地域学習は、学校周辺などの適切な規模の地域を対象として、観察・野外調査・文献調査といった地理的調査を行ったり、地形図や主題図の読図、地図の作成などの地理的技能を活用したりすることにより、調査対象地域の場所としての特徴や地域の結び付き、変容、持続可能性などの解明をめざす例示となっている。

具体的には、「(1)地域調査の手法」では①調査対象の選定、②調査項目の設定と調査の実施、③調査成果の整理、④傾向性などの分析、⑤その要因の考察、⑥地図化等による調査結果の発表、「(4)地域の在り方」では①課題の把握、②

対象地域の把握、③課題の要因の考察、④課題の解決に向けた構想、⑤構想の成果発表、といった学習展開による地域の追究が想定される。多面的・多角的な考察のためには、調査のさまざまな成果や収集した複数の資料を比較する、グループでの意見交換により考察や構想を深める、といった取り組みが求められている。

### 4 高等学校地理総合での見方・考え方

高等学校の地理歴史科では新科目「地歴総合」「歴史総合」が必修となる。そのため、身近な地域を対象とする学習は、すべての生徒が高等学校においても取り組むことになる。地理総合では内容C「持続可能な地域づくりと私たち」に、「(2)生活圏の調査と地域の展望」が設定されている。ここでの「社会的な見方・考え方」の視点と方法は、以下のように例示されている。

**視点** 空間的相互依存作用や地域など、生活圏内や生活圏外との結び付き、地域の成り立ちや変容、持続可能な地域づくりなど。

**方法** 主題を設定し、課題解決に求められる取組などを多面的・多角的に考察、構想し、表現する。

地理総合では、生活圏としての地域で顕在化する具体的な課題を主題として取り上げ、生活圏外との結び付き、地域の成り立ち、変容、持続可能性の視点から、課題の解決や解消にむけた地理的な探究活動の展開が期待されている。この地理総合での学びは、これまでの地理Bから姿をかえる同じく新科目の「地理探究」への接続も強く意識されていくことになる。

### 5 見方・考え方の展開と発展性

以上のように、小学校から高等学校までの身近な地域を対象とする学習で働かせることが期待されている「社会的な見方・考え方」の例示を見ると、その学校段階ごとの展開と段階を通じた発展性の構造としては、次のような図式で

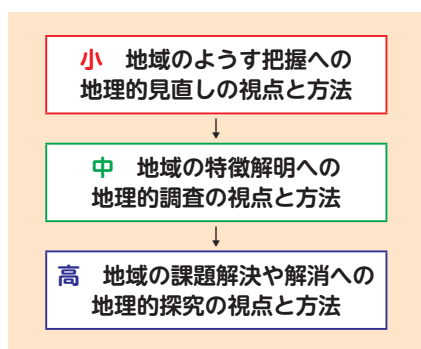


図 地域学習における見方・考え方の構造

考えることができる。

このたびの「社会的な見方・考え方」を、身近な地域の学習にしぼって検討してみたとき、そこには高等学校での本格的な地理的探究にむけた見方・考え方の布石が、小学校と中学校に打ち込まれているともいえる。すなわち、学校段階ごとで完成する地域学習だけをめざすのではなく、小学校での地域学習で、身近な地域を地理的・社会的な空間としてよびおこしたうえで、中学校では、そのような空間をより地理的に探る際の調査の視点と方法を働かせる経験値を積み、すべての生徒が地理を学ぶ最後の機会となる地理総合においては、そこでの学習後においても現実の社会生活の中で継続して自らの生活圏である地域の課題を地理的に探究し続ける視点と方法を働かせていけるような構造化がなされている。

このような構造化の中で、今後の中学校社会科地理的分野で授業実践を進める際に大事にすべき観点や考え方、その在り方としては、「中学校だけで完結させない地理授業」、「地理的分野だけで完結させない授業」があげられる。これらについて、以下で述べたい。

## 6 段階で完結させない授業の必要性

子どもたちも含めた我々の地理的な認識や社会認識にはどこまで行っても終着点はない。しかし、小・中・高等学校それぞれで到達が求め

られる一定の学習や学力の水準は、日本の場合、学習指導要領とその解説が一つの手がかりになり続けている。

このたびの「社会的な見方・考え方」も、ここまで見てきたように、学校段階ごとに期待される視点と方法はそれぞれに異なり、身近な地域の学習では、小学校では地域を地理的に見直し、中学校では地理的な調査を重視して、高等学校では地理的に探究する視点と方法に、各々の重点がおかれている。これらの要素には、身近な地域を子どもたちなりの常識的な見方・考え方から、より学術性を担保しようとする見方・考え方へと段階をふんで発展的に成長させようとする意図が込められている。

もちろん、小学校の社会科の中でも、中学校で重視される地理的な調査の手法を可能な範囲で取り入れたり、中学校の地理的分野においても、高等学校で展開をめざす地域の課題解決や解消にむけた地理的な探究を積極的に取り込んだりする取り組みは期待したい。

我々が身近な地域であれ、いかなるレベルの社会であれ、それを認識しようとしたり、調査しようとしたり、探究しようとする営みには、ある程度の区切りはあっても、完全なる終結にたどり着くことはない。このことを改めて自覚しながら授業を展開する必要があることを、このたびの「社会的な見方・考え方」はさし示しているとも考えることもできる。

そのように考えると、中学校社会科地理的分野は今後、小学校で培われてきた「社会的な見方・考え方」をしっかりと拾い上げて、高等学校以降でも、生徒がその見方・考え方をさらに成長させて働かせていけるような橋渡しを担うことも意識化していく必要がある。

## 7 分野内で完結させない授業の必要性

最後に他分野との関連性についても、確認を

しておきたい。

まず、歴史的分野においては、身近な地域を対象とする学習として、内容A「歴史との対話」に、「(2)身近な地域の歴史」がある。ここでの視点と方法は、以下のようなものである。

**視点** 比較や関連、時代的な背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながり。

**方法** 地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現する。

歴史的分野の冒頭もしくは適切な時代の中で、身近な地域の歴史について、例示された視点で学習することは、歴史を追究する方法そのものを学ぶことのできる有効な機会である、と位置づけられている。

次に、公民的分野においては、身近な地域を対象に含めた学習として、内容D「私たちと国際社会の諸課題」に、「(2)よりよい社会を目指して」がある。この内容では、公民的分野だけでなく、小学校社会科や地理的分野と歴史的分野での学習成果を活用するとともに、ここまで育成されてきた資質・能力がさらに高まり発展するようになることが期待されている。なお、本内容についての視点と方法は、簡潔な箇条書きが難しいため、以下のように整理してみる。

**視点** 持続可能な社会の形成、それは生徒自身によりよい社会を築いていく主権者であり、主体者として、身近な地域や我が国の取組との関連性に着目させるなどの工夫を行い、生徒自ら課題を適切に設定することが求められている。そのように設定した課題については、世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全、経済の開発、社会の発展を調和の下に進めていくことが必要であることを理解できるようにし、このことの理解を基に、世界的な視野と地域的な視点に立って探究させることをねらいとしている。

**方法** ここでの探究の方法としては、一般論としながらも、課題の設定・資料の収集と読取り・考察・

構想とまとめ、といった手順が例示されており、科学的な探究の過程や思考の過程を論理的に表現することをめざした発表などやレポートの作成までが想定されている。

以上のことから、このたびの「社会的な見方・考え方」は、中学校社会科のそれぞれの分野内だけで完結させない意識づけも明示されているといえる。そもそも、社会科の究極的なねらいは、昔も今も、社会認識を通して市民的資質の育成を図ることが主眼とされ続けている。この点は、中学校社会科では地理と歴史の両分野が並行して学習されたあとに、公民的分野の学習が進められるカリキュラム形態に象徴されている。これまで、地理と歴史は社会認識の方法として、公民は市民的資質の内容として、それぞれの役割分担を担ってきた傾向があるが、このような分野ごとの役割化は保持しながらも、その役割に特化しすぎずに、いま一度、社会科の原点としての総合化への回帰を、このたびの「社会的な見方・考え方」には期待したい。

小学校社会科での総合性のもとでの学びをいかしながら、中学校から高等学校へむけて分野や科目の中での学習を通して、それぞれに学術的な専門特化を進めながらも、一方では、現代的な諸課題は学際的に解決していく必要がある。このことを、「社会的な見方・考え方」の実践化の中で、先生方と児童生徒がともに意識化していける流れが活発化することを願っている。

※1 『社会的事象の地理的な見方・考え方』の視点は、『中学校社会科のしおり』2017年度3学期号「ほりさげ解説 地理 次期学習指導要領へのかけはし」を参照。

※2 空間的相互依存作用とは、ある場所内だけで完結する空間は存在せず、場所の内外的相互に依存と関係をする中で各々の地域の特徴や特色をもつにいたることを示す地理用語である。

本稿は『日本社会科教育学会全国大会発表論文集』第14号に掲載の内容に加筆と再構成をしたものです。